

15 言語学習アドバイジング

言語学習アドバイジング (advising in language learning: 以下, アドバイジング) は, 言語習得に加え, 学習者の自律性やウェルビーイングの向上を支える教育実践であり, アドバイザーと1対1で行われることが多い。言語教育に心理カウンセリングやコーチングのスキルを取り入れた, 比較的新しい実践として注目を集めている (Kato & Mynard, 2016; Mynard & Carson, 2012)。ここではアドバイジングを理解する上で重要なポイントを5つ紹介する。

●言語教師とアドバイザーの違い

アドバイザーは言語教師（以下, 教師）とは異なった役割を持つ。教師がアドバイザーになれないわけではないが, 教師とは違う意識, 態度, スキル等が必要になる。例えば, アドバイジングには決まったシラバスやカリキュラムはなく, 各学習者のニーズに合わせて柔軟に展開する。また, アドバイザーは知識を教える者というよりは省察を促す聴き手 (reflective listener) であり, 学習者が自分の学習に関する気づきを得られるよう援助する。詳細は Gardner and Miller (1999) を参照してほしい。

●対話の重要性

多くのアドバイジングは対話 (dialogue) を中心に進む。アドバイザーの対話スキルにより, 学習者は自身の学習を広く深く具体的に省察することができ, より効果的な学習の継続が可能となる。例えば, 学習者の話した内容をアドバイザーが要約して, 誤解を防ぎつつ傾聴の態度につなげることで信頼関係を深めたり, 小さな達成を褒めて動機づけを高めたりする。また, 学習者が目前の学習に固執していれば鳥瞰図的な認識を促し, 学習方略の選択が堂々巡りであれば本質を突く質問を投げかけて重要な点を思い出してもらう。さらに, 具体的にどう学習するかについて対話し, 自分の責任で実際の学習に移れるよう配慮する。対話のスキルは Kato and Mynard (2016) に詳しい。

●様々なツールの使用

対話に加えて様々なツールも使われる。学習目標を立て, 学習内容を記録し, 自省を促すシート, 学習方略のリスト, 学習者が自分を知るための質問紙尺度等が代表的で, 他に, 自分の気持ちを絵で描いたり, 学習の全体像を地図化したり

する方法もある。すでに様々なツールが開発されており (Kato & Mynard, 2016; Mynard & Carson, 2012), アドバイザーはこれらを適切に用いていく必要がある。Yasuda (2020) では、ツールどうしをどのように繋げて用いれば効果的かを検証し、より円滑に自律性を育成するための半構造化型アドバイジング (semi-structured advising program) を提案している。

● 学習者の時系列的変化

アドバイジングでは、対話やツールを用いて、自律に向けた時系列的な変化を促していく。Kato and Mynard (2016) では、この変化の達成を4段階で説明している。第1の行動を促す段階 (prompting action) では、アドバイザーから学習者に現状を解決するための提案を行い、新しい変化へのきっかけを作っていく。第2の視野を広げる段階 (broadening perspectives) では、学習者が持つ考え方や価値観を押し広げ、深い洞察や批判的思考でより広い視野を持てるよう促していく。第3の気づきを行動に変える段階 (translating awareness into action) では、ここまでで学習者が得た気づきを、より具体的かつ実際的な行動や目標達成へとつなげていく。第4の変容をサポートする段階 (assisting transformation) では、学習者の学習に対する意識や態度を全く異なったものへと変えていく。自身の学習にオーナーシップを持って適切にコントロールし、自らの人生の一部へと昇華させていく段階である (日本語訳の作成は筆者による)。

● 理論的枠組み

最後に、アドバイジングを統合的に説明する理論的枠組みを2つ紹介する。両者には共通項も多く、アドバイジング中に学習者が何をどう経験するかを主軸に説明しているが、焦点の當て方やモデル内の構成要素が異なる。Mynard (2012) は、**構成主義／構築主義 (constructivism)** と **社会文化理論 (sociocultural theory)**に基づいたモデルを提案し、アドバイザーとの対話 (dialogue), それを促進するツール (tools), 両者を取り巻く多様な文脈 (context) を重視している。一方、Yasuda (2020) の理論的枠組みでは、応用言語学と心理学の知見に**現象学 (phenomenology)** を応用し、アドバイジングを通して学習者の内部、すなわち主観的世界 (subjective world) における思考、感情、認識等にどのような変化が生じるかに焦点を当てている。その上で、最終目標として**主観的幸福感 (subjective well-being)** の達成が重要であると説明している。

(安田 利典)